特別展

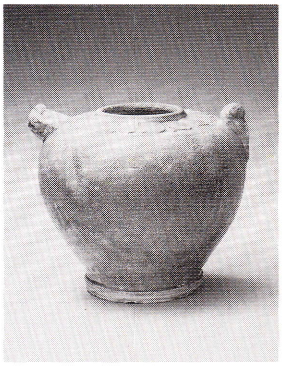
タイ・ベトナムの古陶磁

会期　昭和63年8月9日(火)～9月25日(日)

講演会　昭和63年9月10日(土)午後2時～
「タイ・ベトナムの陶磁について」
恵泉女学園大学教授　長谷部楽爾氏

渋谷区立松濤美術館

27　青花牡丹文盤(部分)
ベトナム　15世紀



1　黄白釉蓮弁文水注
ベトナム　12～13世紀

深い藍色の顔料で、どことなく優しい自由な絵付けが施された「安南焼」（ベトナム）の青花、東南アジアの海の色を連想させる「宋胡録」（タイ）の青磁、愛らしい表情の魚を鉄絵で描いた「ス（ソ）コタイ」（タイ）など、タイ・ベトナムの古陶磁はわが国では古くから日本独得の呼び名で親しまれてきました。

今回の展観では、この素朴で温かな魅力にあふれたタイ・ベトナムの古陶磁を陶磁史の流れを追い、陳列いたします。

I　ベトナム

(1)李・陳時代

ベトナムの古陶磁の日本での呼び名「安南焼」とは、唐時代、現在のハノイに、唐王朝の対外政策のひとつとして安南都護府が置かれたことに由来します。

ベトナムは中国文化の影響がとくに強く、陶磁の創始も中国の支配下に置かれた1世紀以後のことと考えられています。

のち、ベトナム独自のやきものをつくるようになったのは、ハノイの南、清化州（現タインホア省）から出土した清化焼などから、11世紀初・李王朝頃と推されています。

早期の作、黄白釉蓮弁文水注(1)は、獣首をかたどった小さな注口と、オオム形の把手を施し、中国の陶磁に祖形をもたない作品で、当初ベトナムではこのように独創的なやきものを焼いていましたが、やがて時代が下るにつれて中国色が濃い作品を作るようになりました。

13－14世紀の白磁・青磁・緑釉・褐釉などの単色釉の陶磁には、中国宋代の陶磁に共通する劃花や印花の装飾方法が駆使され、見込みには蛇の目の釉剝ぎ、もしくは目跡が残されています。

陳朝（1225－1400）が成立すると、陶磁製品は日用品や交易品として量産されるようになり、単色釉の焼物に加えて、鉄絵がはじめられました。きめの細い黄白色の素地に白く化粧掛をして、菊花文・唐草文を手なれた筆運びで鉄分の多い顔料で描き、透明釉は一部が失透、高台内に鉄渋が塗られ、見込みに目跡を残すこの種の鉄絵はやがて青花・五彩へと引きつがれる絵付陶磁の創始として注目されます。

34　青花双鳥文盤
ベトナム　15～16世紀
大阪市立東洋陶磁美術館蔵

(2)黎時代

ベトナムでは、白地鉄絵に似た青花絵付けの元様式の青花菊花文皿(24)などの遺例により、14世紀頃から青花が焼成されたと推測されています。初期のベトナム青花は、大ぶりの盤や壺がみられ、青花魚文輪花盤(26)は元様式をよく伝えた優例です。

15世紀に青花磁器は盛期をむかえ、様式美は国風化され、器に施された花唐草も中国陶磁にはみられない表現方法になり、鳥・魚は身近かな親しみやすい図案へと変化していきました。躍動感あふれるみごとな鋭いくちばしをもつ鳥を配した青花双鳥文盤(34)はその特異な絵付と焼上りの素晴らしさで評判の高い作品です。

15世紀後半に五彩が創始され、イスラム真鍮製筆管を原形に明前期の景徳鎮窯がこれを手本につくった作品を模した五彩瑞獣文筆箱(42)は器の内外に緑・赤釉がさされ、ベトナム五彩の初期の貴重な資料となっています。また、これらの五彩のなかには金彩を施したもの（40, 45）も見られます。

東ジャワ、マジャパヒト王朝の王宮址トローランで出土した青花・五彩陶片(49)はベトナム様式を確立した完成度の高い遺例です。

49　青花・五彩陶片（トローラン出土）
ベトナム　15～16世紀

II　タイ

(1)クメール

アンコールワット（12世紀頃建立）などの壮大な建築物や石彫像で知られる現カンボジアを中心に活動したクメール族はアンコール

時代後期（12世紀）に最盛期をむかえ、その領域はラオス（ヴィエンチャン附近）からタイ・メナム河流域にまで達しました。

タイのアユタヤ北方ロッブリもクメール文化の中心で、タイの人々は出土するクメール様式の黒釉陶をロッブリ陶と呼んでいます。

アンコール出土の黄白釉小瓶(52)は、口縁部・首から肩にかけて金属器風の隆起文が施され、「クレン・タイプ」と呼ばれるクメール陶磁の早い時期に焼成された一群の代表的な遺例のひとつです。

11世紀前半から見られる黒釉陶はバラスター（手摺）形の口縁をもつ瓶(57)、動物をかたちどった容器(60, 61)などがあり、最盛期(12世紀前半）の作品は、なによりも洗練された美しい形姿が特徴です。

これらの黄白釉・黒釉を掛け分けた二色釉のものも11世紀中葉から焼成されました。

(2)タイ中部

タイ族は13世紀になってはじめて「スコタイ王国」統一国家を建設しました。中部のヨム川流域のスコタイ・シサッチャナライ・サワンカローク窯とメコン・メナム支流にはさまれたカロン・サンカンペン・パーンなど北部ランナータイ王国活動地域とは仏教彫刻等からみても別個の文化圏として近年では区別して考えられています。

中部のやきものには太陽・蓮・魚文(66)（乳白色の地・砂色の素地に白化粧・青磁などがある）・民族色豊かな唐草文様を配した鉄絵、中国龍泉窯の青磁と類似した青磁などが知られています。

(3)タイ北部

タイ北部窯の最盛期は、ランナータイ王国時代の15世紀頃であったと考えられています。

カロン窯ではていねいに形づくられ、かすかに黄緑を帯びた白磁双耳瓶(80)や、篦で大胆に文様を表わした褐釉草文平鉢(83)、黒々と太い力強い線で描かれた鉄絵草花文鉢(82)、パーン窯では簡略化された魚文を配した鉄絵双魚文鉢(85)、厚手で堅くやきしまった深い緑色を呈する青磁の大皿(84)など数多く焼成しています。これらの諸窯の研究はいづれも遅れており、今後の調査がとくに待たれています。

III　安南・宋胡録

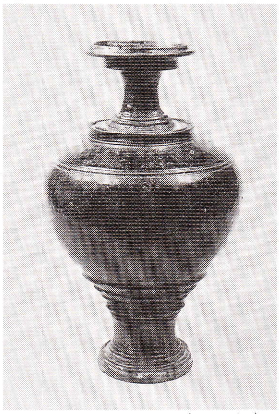
日本では、桃山時代末期から江戸時代初頭にかけ、茶の湯の世界でとくに水指・茶碗・花生に用いられたタイ・ベトナムの陶磁は朱印船、シナ　ジャンク船、オランダ船などによって舶載されました。

ベトナム青花のなかでは、徳川将軍家の柳営御物として知られる青花龍文瓶、銘　白衣(87)は花生として伝世し、景徳鎮窯の元様式の青花のもっとも優れた作品であると同時に、他に類例をみない貴重な陶磁です。このほか日本で「絞り手」と呼ばれている灰白色の胎にやや黄味帯びた釉の下に鉄分の多く黒ずんだ青料が流れて染めの「絞り」のようになった、17世紀以降に焼かれた陶磁が伝わっています。この絞り手の茶陶として著名なものに胴に大きく蜻蛉を描いたものがあり、一般に「蜻蛉手」の名で親しまれています(89)。

また、江戸時代初期、京都下鳥羽の庄司で朱印船貿易を手がけた大沢四郎右衛門が安南よりもち帰った陶磁(86, 90, 91, 92)は請来時期のほぼ確定出来る伝世品です。

五彩は、通称「紅安南」と呼ばれ、五彩花文碗(97)は紅安南茶碗として名高い作品です。

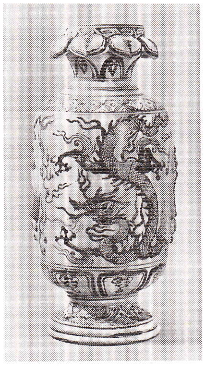
さらにこれらのタイ・ベトナムの古陶磁は日本人の美意識を刺激し、17世紀には瀬戸窯・御深井窯、19世紀に入って京都の永楽保全、江戸の楽々園焼もこぞってこの写しを焼いて、そのやきものの美しさを継承しようとしたことは特に興味深く思われます。



57　黒釉長頸瓶　クメール(ロッブリ)
11～12世紀

66　鉄絵魚文鉢
タイ中部　15世紀

84　鉄絵草花文鉢
タイ北部



87　青花龍文瓶　銘　白衣
(重要文化財)
伝世品　14～15世紀

● 美術相談

美術作家を招き、皆さんの作品を見ながら、技術指導や相談を行います。美術史・美術図書の相談にも応じます。

★相談日時・相談員

8月28日(日)　午後1時～4時
　洋画家　　遠藤 原三氏
　日本面家　戸田 康一氏

9月18日(日)　午後1時～4時
　洋画家　　宮田 翁輔氏
　日本画家　荒井 朝吉氏

★申し込み方法　事前に電話で相談内容をお知らせください。

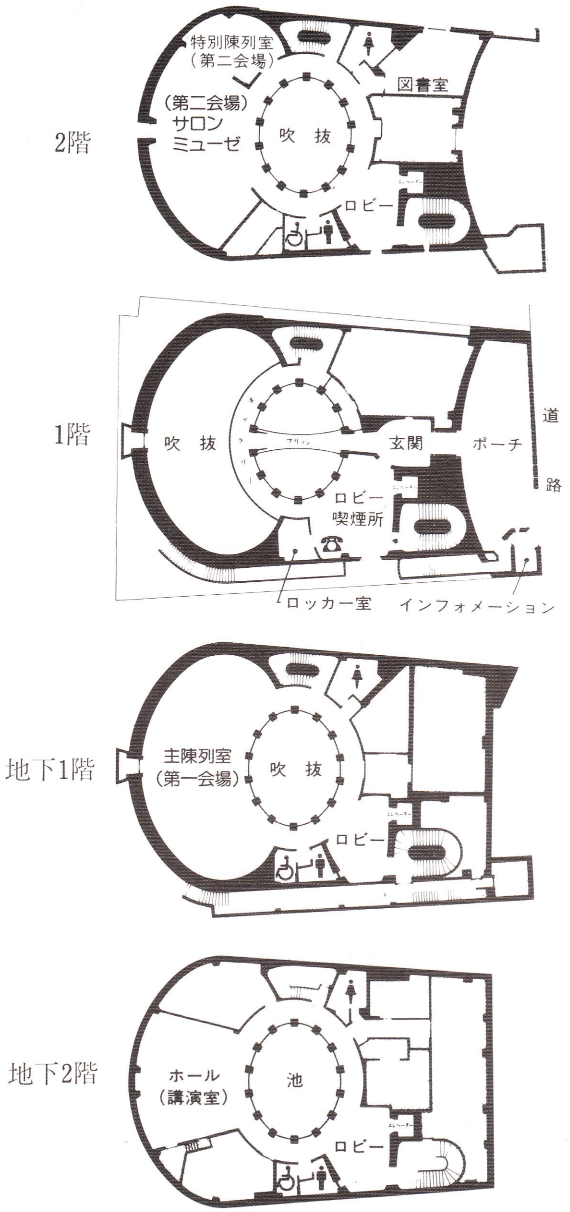
★料金　入館料のみ

● 美術映画会

8月21日(日)　午後2時～3時
「安宅コレクション　中国の陶磁」
「安宅コレクション　韓国の陶磁」

9月4日(日)　午後2時～3時
「黒陶ハンネラの村」

松濤美術館・平面図

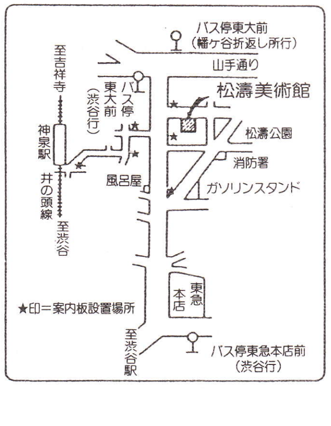


●会　　期　昭和63年8月9日(火)～9月25日(日)

●休 館 日　第2日曜日及び他の週の月曜日、祝日の翌日
8月／14日(日)・22日(月)・29日(月)
9月／5日(月)・11日(日)・16日(金)・19日(月)

●開館時間　午前9時～午後5時(ただし入館は4時30分まで)

●入 館 料

	個　人	団体(20人以上)
一　　般	200円	160円
小中学生	100円	80円

案　内　図